

わくわく!ふくいっ子

R8.2.18 文責 福井小学校長 鶴本正道



「どうしても」という強い想いが、自分を動かす力になる

冷え込みが厳しい毎日ですが、校庭を走る子どもたちの白い息を見ていると、冬ならではの力強さを感じます。冬季オリンピックも終盤を迎えています。放送が深夜であるため、ライブ中継を見ることはできませんが、毎日感動をいただいています。

さて、保護者の皆様は最近、心に深く響いた言葉はございますでしょうか。私はNHKの冬季オリンピックのテーマ曲である人気バンドback numberの「どうしてもどうしても」という楽曲の歌詞に触れ、改めて、人を想う力や願いの純粋さについて考えさせられました。歌詞の中には、自分の不器用さを認めながらも、どうしても譲れない、どうしても伝えたいという真っ直ぐな感情が溢れています。

どうしてもどうしても
ああどうしても
欲しいものは同じで
渴きを目印にして
ここに掴みに来たんだ



※back number「どうしてもどうしても」より一部引用

この「どうしても」という言葉は、理屈ではありません。計算や損得を超えて、心の奥底から湧き上がる一途なエネルギーです。今回のオリンピックでは、そんな想いが生んだ奇跡をいくつも見る事ができました。例えば、フィギュアスケート・ペアの「りくりゅう」こと三浦・木原ペア。ショートプログラムでのミスという逆境を跳ね除け、フリーで完璧な演技を見せて掴み取った大逆転の金メダル。その滑りには、まさに「どうしても、この場所で最高の演技を届けたい」という執念にも似た強い想いが宿っていました。一方で、スポーツの神様は時に残酷な試練も与えます。スキージャンプのスーパー団体では、降りしきる雪の影響で競技が途中で中止となり、目の前に見えていたメダルを逃すという、やり場のない悔しさを味わった選手たちもありました。しかし、その悔し涙こそが、次への「どうしても」という渴きに変わるのだと教えられます。また、女子ジャンプの高梨沙羅選手が、前回の雪辱を晴らすべく、プレッシャーの中で見せた力強いジャンプには胸が熱くなりました。不器用なまでに真っ直ぐに自分を信じ、跳び続ける。その姿は、歌の主人公が葛藤しながらも進むもうとする姿と重なります。子どもたちにも、いつかそんな「どうしても」に出会ってほしいと願っています。

- ・「どうしてもこの問題を解けるようになりたい」
- ・「どうしてもあの楽器を弾けるようになりたい」
- ・「どうしても50mを8秒台で走りたい」



そんな強い想いが出発点となり、人は一歩前へ踏み出す勇気を得るのだと思います。この曲の主人公は、決して自分を器用な人間とは言っていません。むしろ、戸惑いや迷いの中にいます。学校生活も同じです。最初から何でもスマートにこなせる必要はありません。転んだり、言い淀んだりしながらも、自分の心に嘘をつかずに進むもうとする姿こそ、尊いものです。完璧ではなくても、真っ直ぐに生きてほしい、果敢に目の前の「山」を超えていって欲しいと思います。私たちは、子どもたちが抱く小さな「どうしても」を、大人の基準で否定することなく、大切に育んでいきたいと考えています。

「どうしてもどうしても」のメロディを聴きながら、ふと自分の学生時代を思い出しました。あんなに必死になれたのはなぜだったのか。それはきっと、隣に大切な友達がいたからだと思います。そんな友達と今もつながっている幸せを感じています。これからも、子どもたちの一生懸命に寄り添っていきます。